

### ミヨー: 協奏的二重奏曲

1956年、パリ音楽院の課題用に書かれた作品で、明るい雰囲気フランス的な華やかさに満ちている。クラリネットならではの温かく柔らかな音色、軽やかなステップを連想させるフレーズなど、この楽器の魅力を堪能できる佳品である。

### サン＝サーンス: クラリネット・ソナタ

サン＝サーンスは死の年(1921年)、レパートリーが少ない管楽器(オーボエ、クラリネット、バスーン)のためにソナタを作曲した。本作は全4楽章構成。三部形式の第1楽章アレグレットは、優しさに満ちた主題で幕を開ける。第2楽章アレグロ・アニマートは、軽やかなスケルツォ。一転して第3楽章レントは、重々しい足どりのコラールが低音で奏され、やがて同じ旋律が高音で繰り返される。ピアノの分散和音による間奏を経て、間断なく華麗な終楽章へと移り、最後は冒頭の穏やかな主題が回帰して曲を閉じる。

### フランセ: 主題と変奏

ジャン・フランセは、20世紀フランスの新古典主義の作曲家。ナディア・ブーランジェに作曲を学び、幅広いジャンルに多くの作品を残した。作風は一貫して軽妙洒脱で、自然な優美さにあふれているが、1974年に書かれた本曲もその例に漏れず、エスプリに富んだ変奏を楽しむことができる。

### オネゲル: クラリネットとピアノのためのソナチネ

ミヨーやプーランクとともに「フランス六人組」の中核をなしたオネゲルだが、彼自身はスイス生まれのフランス人であり、他のメンバーとは一線を画す作風を持っていた。1922年に書かれた本曲も、そのユニークな特徴をとらえている。全3楽章からなり、最初の2つの楽章は抑制のきいたモチーフが続くが、第3楽章は一転して、ジャズの影響を受けたリズムカルな音楽となる。

### プーランク: クラリネット・ソナタ

プーランクの晩年には管楽器のための3つのソナタが生まれている。フルート・ソナタ(1957)、オーボエ・ソナタ(1962)、そしてベニー・グッドマンの依頼により死の前年(1962)に書かれたこのクラリネット・ソナタである。全3楽章構成で、アイロニカルな旋律を身軽に歌い、甘い感傷に浸り、深い憂愁に沈むかと思えば、ユーモアに満ちた快活さを取り戻す、といった振幅の大きな音楽だが、特にリズムカルな第3楽章は、とても老境にあったとは思えない瑞々しい感性にあふれている。